

粕壁宿めぐり

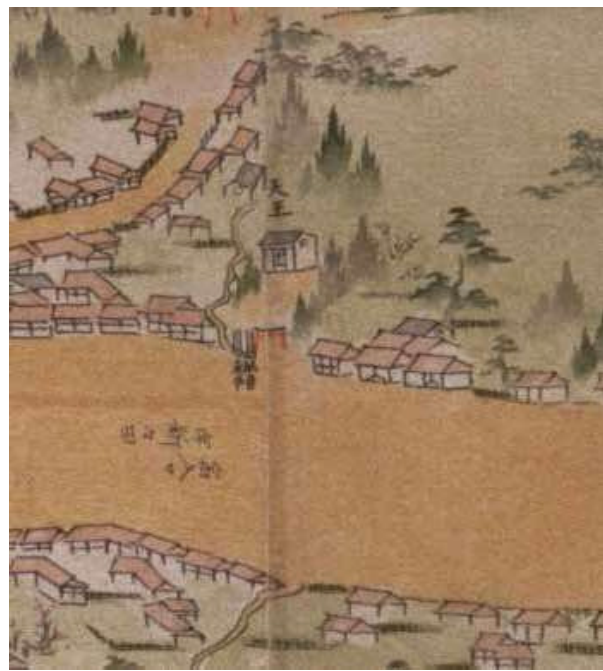
① 八坂神社

やさかじんじや

粕壁宿は、日本橋から九里二丁（約36km）の距離にある。幅約9mの道沿いには、約1.1kmもの町並みが続いてきた。嘉永二年（一八四九）には、人口は三七七九人、旅籠屋は三七軒あった。宿の入り口にあたる八坂神社は、江戸時代には牛頭天王社と呼ばれた。明和七年（一七七〇）に火災に遭い、詳しい由来は不明だが、宿の市神として信仰された。神社の祭礼は、現在の春日部夏祭りの起源でもあり、江戸時代には毎年六月（旧暦）に行われた。



昭和37年（1962）一宮交差点



分間延絵図にみる八坂神社

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives



案内板の位置

【QRコード】



WEBでも解説をご覧いただけます



粕壁宿めぐり

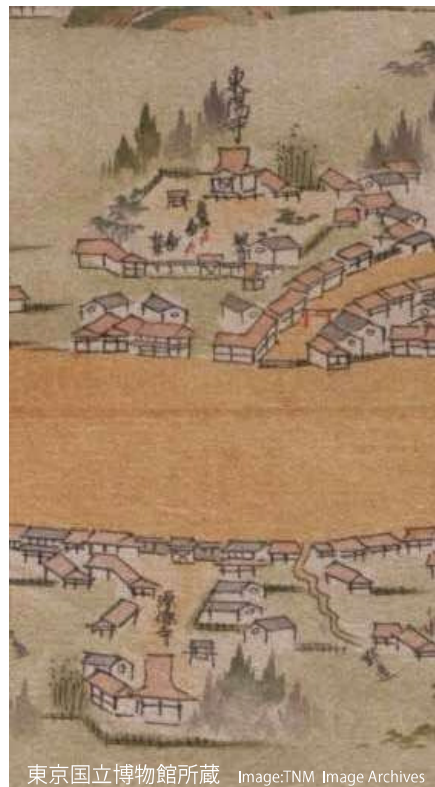
② 東陽寺・源徳寺

とうようじ げんとくじ

新々田しんしんでんと呼ばれるこの辺りは、宿場
 のなかでは新興の地だった。東陽寺
 は、文明年間（一四六九〜八七）に
 春日部八幡神社の東隣に開山したが、
 寛永元年（一六二四）に焼失し、寛
 文二年（一六六二）に当地で中興し
 たと伝えられる。松尾芭蕉まつおばしやうに随行ずいこう
 した弟子曾良そらの日記に「廿七日夜カス
 カへ二泊ル」とあり、元禄二年（一
 六八九）三月二十七日、芭蕉が「奥
 の細道」の旅で同寺に宿泊したとも
 いわれている。向かいの源徳寺は、
 明暦元年（一六五五）に開山したが、
 元文四年（一七三九）に火災に遭い、
 故事は不詳である。



昭和 10 年（1935）新々田の町並み



東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

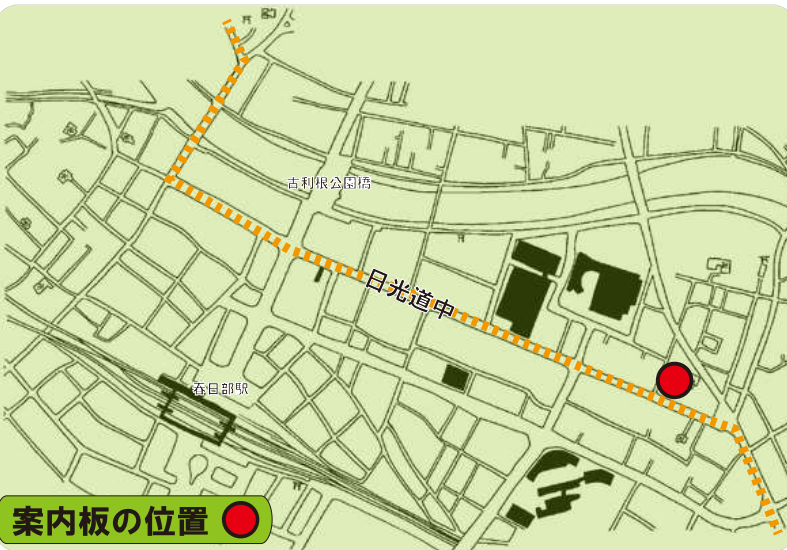
分間延絵図にみる

東陽寺・源徳寺



【QR コード】

WEB でも解説を
ご覧いただけます



案内板の位置 ●

粕壁宿めぐり

③ 脇本陣跡

わきほんじんあと

文化会館前交差点の付近には、かつて水路があり、三枚の板石の橋が架けられていたため、この辺りは三枚橋と呼ばれた。脇本陣は大名や高僧が宿泊・休憩する本陣の予備施設である。中宿（仲町）の蓮沼屋庄兵衛が勤めたが、天保元年（一八三〇）に現在地で旅籠屋を営んでいた高砂屋竹内家が勤め、嘉永二年（一八四九）から幕末まで本陣になった。明治九年（一八七六）六月、同十四年（一八八一）七月、明治天皇の東北巡幸の際、高砂屋は御昼食所となった。宅地は四一七坪あったと伝えられる。



昭和 37 年（1962）三枚橋付近夏祭り



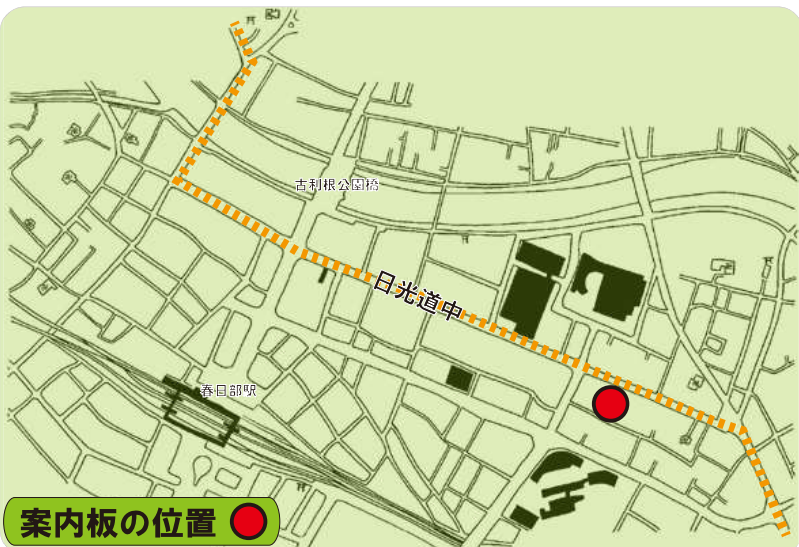
分間延絵図にみる三枚橋付近

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

【QR コード】



WEB でも解説をご覧いただけます



案内板の位置 ●

粕壁宿めぐり

④ 本陣跡

ほんじんあと

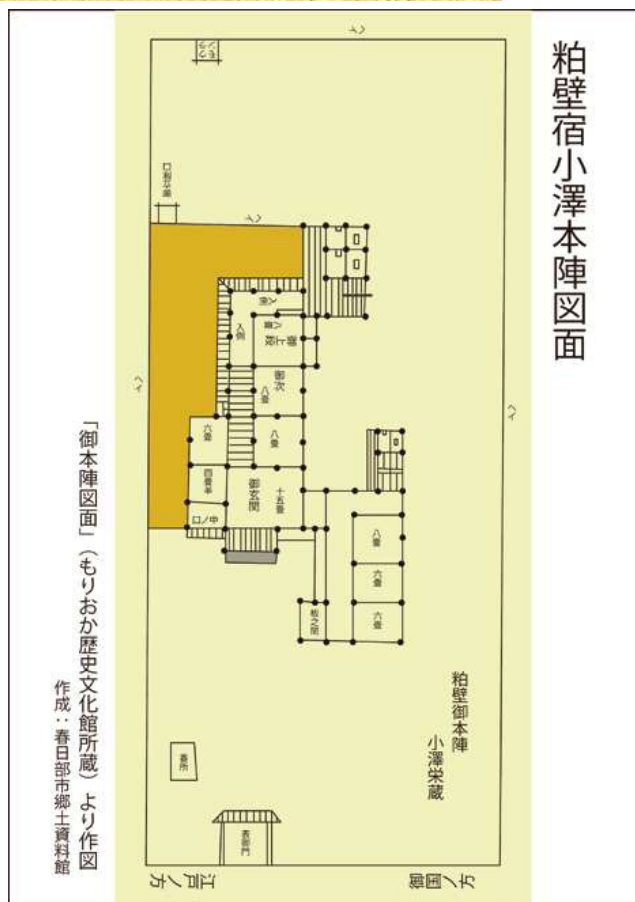
本陣は、大名や高僧が宿泊・休憩する公用の施設である。古くは、関根次郎兵衛家が勤め、その後、現在地の関根助右衛門家、見川家、小沢家、竹内家の順に四度移転した。日光山法会など、公用の通行者が多い時には、最勝院・成就院が宿泊施設として利用されることもあった。

年代	本陣を勤めた家	現在地
不明	関根次郎兵衛家	仲町郵便局辺り
不明	関根助右衛門家	標柱④
宝暦4年(1754)～	見川家	埼玉りそな銀行向かい辺り
文化6年(1809)～	小沢家	群馬銀行辺り
嘉永2年(1849)～	竹内家	金子歯科医院辺り



東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

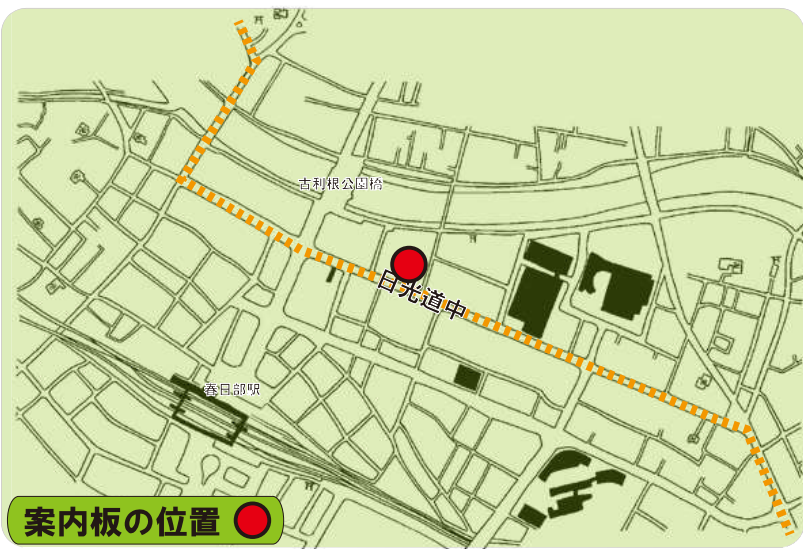
分間延絵図にみる本陣（見川家）



粕壁宿小澤本陣図面

「御本陣図面」(もりおか歴史文化館所蔵)より作図
作成：春日部市郷土資料館

文化6年(1809)～嘉永2年(1849)まで本陣を勤めた小沢家の屋敷図面



案内板の位置 ●

【QRコード】
WEBでも解説を
ご覧いただけます



粕壁宿めぐり

⑤ ミセと蔵

なかじゆく なかまち
 中宿（仲町）と呼ばれたこの辺りには、江戸時代に米問屋など蔵造りの商家や旅籠屋などが多く立ち並んだ。粕壁宿の商家は、間口が狭く奥行き
 の長い敷地で、街道の並びには商業空間としての「ミセ」を、その奥には生活空間としての「オク」がつくられた。このような短冊状の地割は、江戸時代の宿場町にみられる歴史的な景観の一つである。街道の北側の商家は古利根川沿いまで蔵を連ね、舟を乗りつけて荷を上げ下げされた。現存する蔵造りの建物は、火災除けのため、幕末から明治期にかけて建てられたものが多い。



昭和 10 年（1935）仲町方面



分間延絵図にみる中宿（仲町）付近

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives



案内板の位置 ●

【QR コード】



WEB でも解説をご覧いただけます



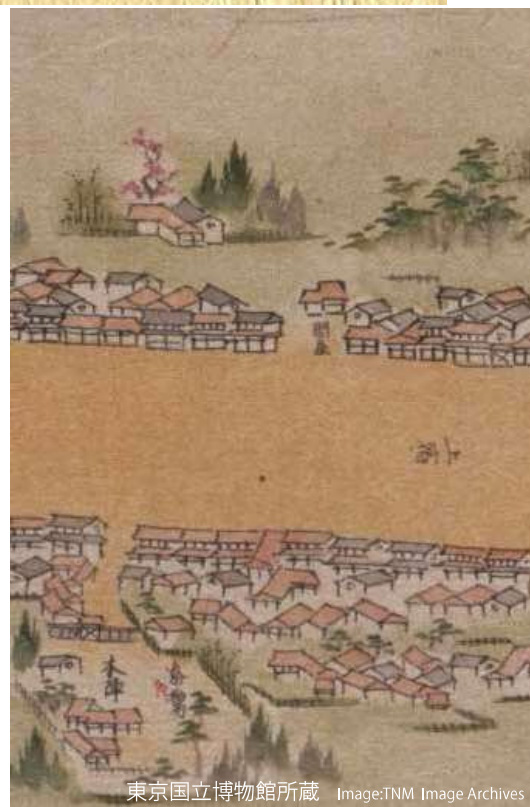
粕壁宿めぐり

⑥ 問屋場跡

問屋場は、公用の旅人や荷物を運ぶ人馬を手配した施設である。粕壁宿では、継送に必要な人足35人、馬35匹の常備が課せられていた。この辺りは上宿（上町）と呼ばれ、人夫が集まることから、飲食店も多く、月に六度の市がたった。なお、問屋場は文政九年（一八二六）に三枚橋に移転した。向かいの路地の神明通りは、名主や本陣を勤めた見川家の屋敷内の通路だった。通り沿いの神明社には同家の屋敷神といわれる見川稻荷が残っていた。

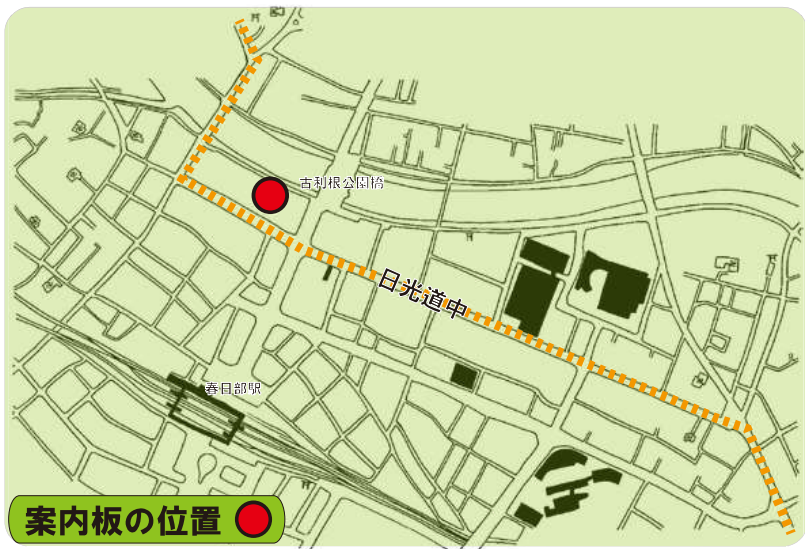


昭和10年（1935）上町方面



東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

分間延絵図にみる
上宿（上町）付近



案内板の位置 ●

【QRコード】

WEBでも解説を
ご覧いただけます



粕壁宿めぐり

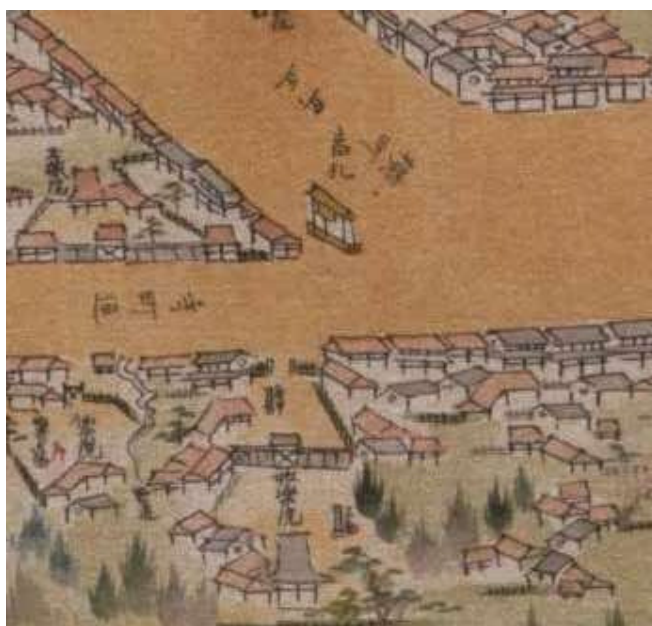
⑦ 高札場跡・浜島家住宅土蔵

こうさつばあと はまじまけじゆうたくどぞう

この十字路は、明治二十二年（一八八九）の岩槻新道いわつきしんみちが開通してからのもので、それ以前は日光道中にっこうみちちゆうと寺町てらまち通どおりが分岐する三叉路さんさろだった。多くの人びとが集まる場所であることから、幕府からの触書ふれがき（法令等）を掲示する高札場（高さ3.1m、幅4.6m、奥行1m）が設置された。通りの向かいにある黒壁の土蔵は、戦前まで佐渡屋の屋号で米穀商を営んでいた、浜島家の土蔵（国登録有形文化財）である。明治時代前期には建てられていたと推定され、1階は座敷、2階は使用人の部屋兼倉庫として利用された。



明治42年（1909）辻にあった商家



分間延絵図にみる

高札場付近

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

【QRコード】



WEBでも解説をご覧ください



案内板の位置 ●

粕壁宿めぐり

⑧ 新町橋・河岸場跡

新町橋は、江戸時代には大橋と呼ばれ、古利根川に架かる唯一の橋であった。長さ16間（約29m）、横3間（約5m）の板橋で、高欄が付いていた。架け替えにあたっては、幕府が費用を負担し、往來を妨げないように仮橋が架けられた。新町橋の上流には、上喜蔵河岸と呼ばれた船着場があり、石垣の一部が現存している。江戸時代、粕壁宿では共同で河岸を利用し、古利根川の水量が多い六月中旬～八月中旬（旧暦）には、小型の高瀬船などで米や生活物資を運搬した。



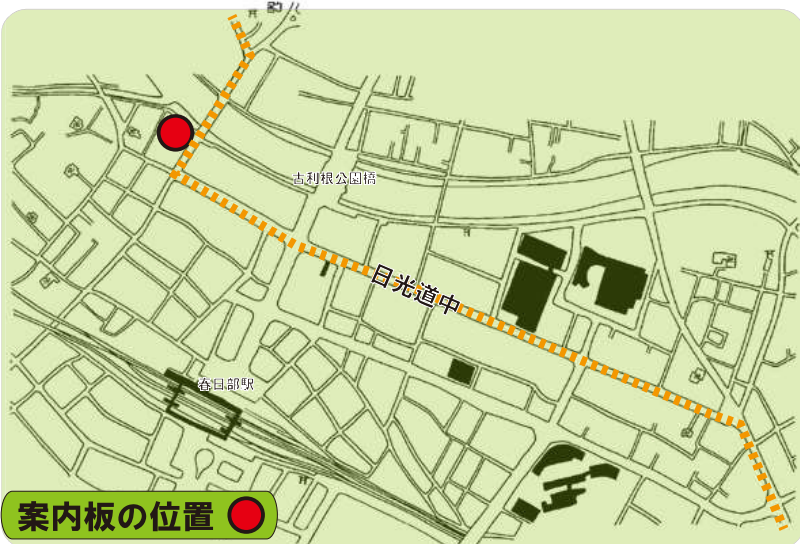
昭和10年（1935）

八丁目から新町橋方面



分間延絵図にみる新町橋

東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives



案内板の位置 ●

【QRコード】



新町橋・上喜蔵河岸場



WEBでも解説をご覧ください